広がるバリアフリー旅行

障害者も高齢者も気楽に参加できるバリアフリーの旅が年々盛んになっている。来春には、福祉の知識や介護技術を習得した旅行ガイドのエキスパートを育てる専門学校の学科もできる。高齢者向けに介護士を養成する旅行会社も登場。高齢社会を迎えてニーズが高まるのに伴い、バリアフリーの旅は拡充が進んでいる。

ヘルパー添乗員育てます

ホームヘルパー2級取得

上級救命講習　手話実技

もんくりアのビザの紛失を見にきた旅行者（右）実技を教えるクラブツーリズムのホームヘルパー2級養成講座（いずれもクラブツーリズム提供）

「がんを宣告された人が、最後の旅立ちだと万里の長城に行ったら、『次はオーストラリアだ』と元気になった。旅はその人の世界を広げ、健康にし、自信を与える。こんなに社会を明るくするものはない。ハンディを抱える人がもっと旅を楽しめるシステムをつくってほしい」

進行性筋萎縮症（ALS）で身体が不自由だが、精力的に旅行に出かけてきた勝矢光信さん（五七）は大勢の学生や旅行・福祉関係者を前に演壇でこう語った。

勝矢さんは江戸川区役所で福祉問題の電話相談員（非常勤）をつとめながら、これまでに車いすで海外に二十回、国内も北海道から沖縄まで出かけるなど豊富な旅行経験を持っている。

そこでバリアフリーの旅を実現するためにユニバーサルツーリズム学科を設立した、駿台トラベル＆ホテル専門学校（豊島区・西岡久雄校長）が記念シンポジウムに講師として招いた。

同学科は、来年四月、全日制で二年コースでスタート。定員四十人で、高卒十八歳以上が対象。バリアフリーの基礎知識をはじめ、施設を見学して実技も学ぶ。旅行業務取扱主任者だけでなく、手話実技、ホームヘルパー二級、上級救命講習などの技術取得も目指す。

小野鎮学科長は「これからの旅行業者は、旅のことだけでなく、福祉の専門知識を持ったプロが求められる。障害者白書などをみても、旅行のニーズは高い」と、設置の目的を説明する。

実際の授業にあたっては、JTBの専門研究機関「JTMバリアフリー研究所」が手助けする。同研究所は、業界でも先駆的な調査機関。今回の学科設置にあたって、教科書などを新たに共同開発するという。

新学科開設記念シンポジウムで講演した勝矢光信さん＝豊島区の同校で

駿台トラベル＆ホテル専門学校のトラベル学科で試験的に行われたバリアフリーのモデル授業＝東京都豊島区で（同校提供）

草薙威一郎所長は「日本は欧米に比べ、公共施設や交通機関でのバリアフリーが二、三十年遅れていたが、何とか障害者が旅行に出かけられるところまできた。まだ不十分だが、団塊の世代が六十五歳になる二〇一〇年までには、仕組みを整えなければなりません」と、同専門学校にエールを送る。

日本で海外旅行が自由化されたのは東京五輪が開かれた一九六四年だが、六七年には国際スポーツ大会の応援で障害者がロンドンへ旅している。

九〇年代に車いすで行くパッケージツアーが登場し、二〇〇〇年に公共交通機関の駅施設にエスカレーターやエレベーター設置を義務づけた交通バリアフリー法が施行されたことで、障害者、高齢者の旅が活発になった。

現在、バリアフリー旅行専門の部署を設けた旅行会社も出てきている。中でもユニークな展開をするのが近畿日本ツーリストから分社化したクラブツーリズムグループ。

同社は要介護者を対象とした旅行を扱うほか、四カ月間のホームヘルパー養成講座を開き、ツアーに同行するボランティアを支援。ツアー添乗員全員がホームヘルパー二級を持つ徹底ぶりだ。

クラブツーリズムの長橋正己・ライフケアサービス事業部長は「旅行会社に頼らなくても個人で旅ができる時代だが、われわれのノウハウはバリアフリーの世界で、まだまだ生かせる」と介護業への展開に自信を見せる。

同社は、旅好きな人を対象に八〇年に発足した近ツーの会員組織「クラブツーリズム」を母体にしている。現在は会員約七百八十万人を擁し、カルチャースクールやクラブ活動も展開。会員の高齢化に対応するため、九五年にバリアフリー旅行センターを開設、研究と実践を重ねてきた。

「国内の温泉めぐりだけでなく、オホーツク海の流氷ツアーやアラスカ、ネパール、エジプトなど海外にも出かけている。今年は五千人を送り出した。これは八年前の約五倍です」と長橋さん。

来春には高齢者、障害者が約二百人参加する「ドリームフェスティバル」をハワイで開催するなど新企画も目白押し。

詳細は駿台トラベル＆ホテル専門学校＝電03(3946)1211、クラブツーリズム＝電03(5323)6915＝へ。

文と写真・吉岡逸夫／紙面構成・三島彩

TEL 03(5461)8030 / FAX 03(5461)8033
Eメール t-hatsu@tokyo-np.co.jp

わが街わが友　百人百話

10〈全十二話〉

代々木②

成功の陰に温かい好意

代々木だけでも三回越して、今は二間の住居である。渋谷にも新宿にも二十五分で行ける。新宿のジムも役者には必要な鍛錬場だ。ジムの行き帰りに通る参宮橋近くに「昇龍」という美味しい餃子屋があって、おかみさんを私はお母さんと呼んでいる。御飯のない時はお世話になっている。

一九九一年イギリスで催された「ジャパン・フェスティバル91」に能や歌舞伎や相撲と一緒に「はなれ瞽女おりん」が選ばれた。嬉しかったけど、問題は費用だ。役者・スタッフ四十五人の旅費、滞在費、大道具、照明、衣装、三味線の運送費で一億円近くかかるという。

私は一年前から資金集めに歩いた。生まれて初めて、知らない会社の社長さんに手紙を書いた。真夏の盛りに一日十社回って説明し、援助をお願いした。協力してくれた方の一人である、小島章伸さんは、会社設立二十周年で記念に何か文化的なことに寄付したいと考えていらした。たまたま同じマンションなのでおりんのことを知り、助けてくださった。穏やかな知的な方だ。

おかげでかなりの資金が集まり、イギリスへ行き、大成功を収めることができた。ロンドンの十六紙の新聞が褒めてくれた。公演はニューカッスルから始まった。二日目は日本の皇太子殿下が見にいらした。この催しの総裁なのだ。ロイヤル・ボックスから身を乗り出して御覧になり、終演後、舞台の私達の所へ降りていらした。

とてもナイーブでチャーミングな方で、「良いお芝居でした。とてもよかった」と仰ってくださった。

ロンドンの初日にはジョン・ブローライトとジュディ・デンチが来てくれた。二人ともイギリスを代表する名女優だ。デンチは「よかったよ。泣いたよ」と、目を赤くして私を抱いてくれた。

小島さんは今も応援してくださっている。

（ありま・いねこ　女優　題字も）

行きつけのギョーザ店「昇龍」＝渋谷区で

これから、南伸坊さん、永六輔さんらが執筆します。